



2007年11月20日出発、25日に帰国。たった6日のオランダへの旅である。MRSAをほぼ完全に封じ込め、感染管理の勝者といわれるオランダ。僕はその存在に強い興味を持っていたし、いつかは訪れてみたいと思っていた。ある日、NPO法人のHAICS（ハイクス、Healthcare Associated Infection Control Support）研究会に招かれ、感染管理認定看護師（ICN）を対象にセミナーの講師を務めた。HAICS研究会がオランダにICNを派遣するツアーを組んでいたことは知っていた。亀田総合病院のICN（古谷直子さん）も、2006年にHAICS研究会のお世話になり、オランダツアーに参加している（古谷さんの旅行記は、巻末に紹介した。ナースの目から見た、僕とは異なるオランダ観を紹介したかった）。

HAICS研究会での講演を終えた後、僕はずうずうしくも、「通訳でも何でもしますから、僕もオランダに連れて行ってくれませんか」と頼んだものである。駄目元で頼んでみたのである。僕はいつも、トライしてダメならあきらめればいい、トライせずにあきらめるのはもったいないと思いつけて生きており、これまでにも無謀なお願いをいろいろな人にしてきた。あるお願いは聞き入れられ、別のお願いは失笑を持って却下された。それだけのことだ。そんな気持ちで、「オランダに行ってみよう」という話を振ってみたのである。

HAICS研究会の大久保和夫さんは、二つ返事でこの願いを受け入れてくれた。この日は、お願いが聞き入れられたラッキーな日であったのだろう。これが大久保さんにとってラッキーな事象であったかどうかは、僕の知る所ではない。

同じ頃、青木眞先生もオランダに興味を持っておいでだった。何と、青木先生といっしょにオランダツアー、という夢のような話になったのである。日頃からたくさん悩み事を抱えていた僕は、これを機会に旅程中に青木先生にいろいろ相談に乗ってもらいたいと思っていた。何とありがたいツアーであろうか。ところが、出発直前になり、青木先生の方でのっぴき

ならない事情が生じ、参加は不可能となった。あるお願いは聞き入れられ、別のお願いは却下されるのである。こうして、僕の人生のほうもいつものようにチャラになった。人生は常に最後はチャラになるように出来ている。

大久保さんが引率してくださる形となり、僕とICNが2人、順天堂大学の網本真由美さんと滋賀県は野洲病院の松永早苗さん（および彼女の旦那さん）が参加することになった。松永さんの旦那さんもICNではないもののナースで、この5人の珍道中と相成った。大久保さんは以前ライデンに6年半お住まいになっていたとのことで、今回のツアーでは貴重なガイドになっていただいた。このことは後に書こう。そもそも、ライデンで感染管理の見学が出来たのも大久保さんの人脈あってのことであり、そのおかげでたくさんの貴重な出会い、議論、経験をすることができた。大久保さんがいらっしゃらなければオランダツアーも本当にただの観光旅行に毛が生えた程度のもになっていただろう。

こうして僕は、いつものように院内の仕事をパートナーの細川直登先生に押しつけ、部下にあれこれ指示を出しておき、前日になって慌てて荷物をまとめ（厳密にはほとんど妻がパッキングをし）、車を飛ばして成田に向かった。生まれて初めてのオランダ体験である。そこには何が待っているのだろうか。



唐突ではあるが、 オランダに向かうに当たり、 クライフについて考える



僕にとって、オランダと言えば真っ先に思いつくのはゴッホでもレンブラントでも、フェルメールでもシーボルトでも（ホントはドイツ人）、アンネ・フランクでもない。ヨハン・クライフである。

クライフ、といって「ああ」と気がつくのは、ある程度、筋金入りのフットボールファンであろう。1970年代に活躍したこのレジェンドは、Jリーグ以降のファンにはあまり知られていないかもしれない。

彼は史上初めて3回ヨーロッパ最優秀選手になった傑物であり、欧州チャンピオンズカップ（現在のUEFAチャンピオンズリーグ）を3回制しており、1974年には西ドイツで行われたワールドカップで「準優勝」している。実を言うと、獲得したタイトルとしては今ひとつで、優勝回数だけ見てみると、同じオランダの選手でもセードルフ（ACミラン）のほうがずっと上である。マラドーナやジダンと異なり、ワールドカップ優勝歴もない。

にもかかわらず、いや、それが故にクライフの印象は引き立つ。記録より記憶の男なのである。1974年のワールドカップ、準決勝でオランダは世界王者であったブラジルをこてんぱんにたたきのめす。ブラジルがワールドカップで惨敗することは珍しい。近年こそブラジルも無様な敗戦をすることはあるが（2006年フランス戦、1998年同じくフランス戦など）、ワールドカップにおいてブラジルは圧倒的に強く、負けても押しながらの惜敗であった（1982年イタリア戦、1986年フランス戦、1990年アルゼンチン戦）。1974年のオランダのように、完膚無きまでにブラジルを圧倒した国はまれである。その試合でクライフはワールドカップ史上に残る美しいジャンピングボレーを決め、「空飛ぶオランダ人、flying Dutchman」と

しゃれた異名をもらったのである。クライフの偉大さは、プレーの美しさにあった。

Flying Dutchman とは、伝説的なオランダ幽霊船、あるいはその船長をさし、後にリヒャルト・ワーグナーがオペラにしている。その有名な伝説と、高々と飛翔するヨハン・クライフを「かけた」わけだ。そう言えば、ヨハン・クライフの頭文字は JC であり、クライフのことを同じ頭文字を持つもう 1 人の歴史的な人物になぞらえ、「ジーザス・クライスト・スーパースター」と呼ぶ人もいた。こちらは、映画にもなったミュージカルをもじっているのであり、世界最大の宗教の指導者にすら、その名前をオーバーラップさせているのである。

1974 年のオランダは圧倒的に強かった。当時のビデオを見直すと、1970 年代のサッカーとは非常にスローで、技術が低く、体力・総力に劣り、ラフプレーがやたらと多いことに気がつく。優勝した西ドイツなどは、非常に泥臭いサッカーをしている。しかし、その中でもオランダとクライフだけは「現代の眼」でみても十分に鑑賞に堪え、今なお美しい。

今でも、最も印象に残るサッカープレイヤーというと、僕が挙げるのはジョージ・ベストとヨハン・クライフである。既に鬼籍に入った北アイルランドの英雄、ジョージ・ベストをもじり、ペンネームで本を書いたこともある（最上文二、「バイオテロと医師達」集英社）。クライフの方は、若い頃のヘビースモーカーがたたってバイパス手術までしているが、今もなお健在で、生けるレジェンドである。ライデン大学の感染管理者達によると、今でも週に何回かはオランダに帰ってきてテレビのコメンテーターをやっているのだそうだ。辛辣でウィットに富んだクライフの論評は僕も何度か読んだことがあるが、あれは今にして思えばオランダ人というプラグマティズム、実際主義の純粹培養だったのかもしれない。

それでも、ワールドカップで、クライフは負けた。クライフとその仲間達は大会最高のパフォーマンスを見せつけながらも、最後は決勝で地元の西ドイツに負けてしまう。1974 年の西ドイツは、ベッケンバウアー、ゲルト・ミュラー、オペラーツ、ブライトナーといったスーパースターを揃

えてはいたが、優勝に値する器を持ち合わせてはいなかったチームである。大会前からチーム内の不和があり、当時、西ドイツ最大のスーパースターであったネッツアーは不調で活躍できず、お隣の「東ドイツ」に予選リーグで負けてしまったようなチームであった。そのような凡庸なチームに、たしかに大会主催国というアドバンテージはあったものの、クライフのオランダは惨敗してしまったのである。

準決勝でブラジルを木っ端みじんにして油断したともいわれるし、オランダは大会中も女の子を呼んでパーティーに興じており、大会を戦い抜く準備はできていなかったとも言われる。すでに述べたように、クライフは有名なヘビースモーカーで試合前後もすばすばタバコを吸っていた。21世紀の現代サッカーから見るとまるで素人集団である。確かに、こんなチームではいくら素晴らしい選手達でも負けてしまうものなのかもしれない。

なぜ、クライフのオランダは負けたのか。僕は何年も考え続けてきた。オランダに来て、その理由が若干分かったような気がする。オランダでは、真の意味でのチームが出来にくいのである。徹底したリアリズム、プラグマティズム、自己責任を迫及した国が、この国独特の感染管理と感染対策をもたらすことになった。サッカーというある種の狂気の祭典においては、リアリズムや自己責任の過度な突出は邪魔なだけである。特に、愛国心が後押しするインターナショナル・マッチではそれが顕著である。クラブでの戦い以上に「代表」の試合が価値をもつ日本は、その具現者であるといっているだろう。ナショナルスティックに、ファナティックに、そしてセンチメンタルに、日本人は日本代表を応援する。オランダには、そのようなナショナリズムやファナティズムやセンチメンタリズムとは無縁なのかもしれない。しかし、センチメンタリズムはパワーである。パワーを失った醒めたオランダ人が、国際試合でタイトルを獲得するのは、極めての難事なのかもしれない（不可能ではない。1988年には、史上最強と呼ばれるストライカー、ファン・バステンを擁したオランダは欧州チャンピオンになっている。がしかし、そのファン・バステンはこの原稿を書いている。